

現代文B	報告課題第三回	年	組	氏名
	解説			

【調律師のるみ子さん】

今回は小説になります。何かを得ることと同様、何かを喪失するという経験は必然的に人間と世界との関係を変化させ、ひいては、自らの在り方を問わせることになるでしょう。この單元では、その何かが読んでいくとわかります。さて、今回は全部で四段落となっています。起承転結のまとまりもわかりやすいため、一つ一つのまとまりを考えながら読み進めていきましょう。

- ① 初め～二三ページ三行
- ② 二三ページ四行～二五ページ四行
- ③ 二五ページ五行～二六ページ一〇行
- ④ 二六ページ一一行～終わり

第一段落―るみさんの日常

事故で右手の人差し指と中指を失ったピアノ調律師・るみさんは、いつも鍵盤中央のA音をほんのわずかに外して調律をしている。優れた音感を持ち穏やかそうな容貌の彼女には、いつの間にかまたピアノの調整が必要となることもあって、仕事の依頼が絶えることがなかった。

第二段落―老人の邸宅での調律（「調律」の失敗）―

紹介を受けて訪れた老人の邸宅で、るみさんはいつも通りの調律をするが「音が違っている」と指摘されてしまう。「A音」もきちんと合わせて「音は合っている」と主張しても老人は納得せず、るみさんは憤然として帰宅する。その後数日間、仕事に身が入らなくなった。

第三段落―ケーキの届いた夜―

ある夕方、十年前の事故で助けた調律師(事故当時は小学生)からお礼と近況を知らせる手紙とともにチョコレートケーキが届くが、甘いものが好きではない彼女はそのまま冷蔵庫にしまった。その夜、寝付けないままにピアノソナタのレコードを聞いたるみさんは、それぞれの演奏でのそれぞれのピアノの輝きに気づく。レコードを聞きながらケーキを食べ始め、夜が明ける頃にはケーキは半分以上なくなっていた。

第四段落―老人の邸宅を再訪（「調律」の成功）―

その日の昼過ぎ、るみさんは老人の邸宅を訪れる。目の前のピアノが持つ特有の響きに耳を傾けて注意深く調律をすると、老人は「うちのピアノの音」が戻ったと朗らかに喜び、るみさんにそのピアノで演奏することを求めた。その求めに応じて、彼女は子供時分に習った短い練習曲を奏でる。

以上が段落ごとの要約と内容のポイントになります。これらを踏まえて報告課題に取り組んでいきましょう。